

I - D - 51

肺疾患におけるサンドウィッチ法とZ-ゲル法とによるCEA値比較検討と肺癌諸因子とCEA-S値との検討

京都大学結核胸部疾患研究所内科II

○荻原順一, 普天間 健, 松井祐佐公, 門 政男, 木野稔也, 泉 孝英, 大島駿作

浜松医科大学内科2

本田和徳

目的 肺癌を中心とした肺疾患におけるサンドウィッチ法とZ-ゲル法とによるCEA値を比較し、スクリーニングとしての敏感度、特異度等について検討した。また、原発性肺癌の諸因子(細胞型, 病期, T因子, N因子, M因子)によるサンドウィッチ法によるCEA値の動向を検討したので報告する。

方法および対象 S56年12月よりS57年4月まで京大胸部研内IIに入院の患者に対し、サンドウィッチ法とZ-ゲル法によるRIAのCEA値(以下S値, Z値と略す)検出を同時に施行。対象は悪性腫瘍群16例, 非悪性腫瘍群25例。またS55年1月よりS57年4月まで原発性肺癌にて同入院患者のS値について諸因子にわけ検討した。対象は, 65例(扁平上皮癌26例, 腺癌20例, 大細胞癌7例, 小細胞癌12例)。

結果 S値とZ値との比較においては, ともに2.5ng/dl以上陽性としたとき以下のとおりであった。(カッコ内はZ値のみ5.0ng/dl以上陽性とした場合を示す)悪性腫瘍群: ㊶いずれも陰性, 3例(6例) ㊷S値(+)Z値(-), 0(0) ㊸S値(-)Z値(+), 5例(2例) ㊹S値(+)Z値(+), 8例(8例)。非悪性腫瘍群: ㊶ 17例(20例), ㊷ 0(1例), ㊸ 5例(2例), ㊹ 3例(2例)であった。S値の敏感度(True Positive/True Positive + False negative)は50%, 特異度(True Negative / False Positive + True Negative)は88%, Z値の敏感度は81.3%(62.5%), 特異度は68%(84%)であった。Z値/S値のratioを検討したが, S値かZ値いずれか陽性を呈した症例では, 非悪性腫瘍群が4.06であったのに対し, 悪性腫瘍群では9.96と高値を呈したことは注目すべきことと思われる。

S値と原発性肺癌の諸因子との比較について, 例数, 陽性率, mean ± S.D.の順で記す。総数65例, 27.7% 4.96 ± 10.29。①細胞型: 扁平上皮癌26例(I期5例, II期6例, III期9例, IV期6例)16.0% 4.00 ± 10.50, 腺癌20例(I期6例, II期0例, III期2例, IV期12例)55.0% 9.65 ± 13.21 未分化癌(大細胞癌+小細胞癌)19例(I期5例, II期2例, III期5例, IV期7例)15.8% 1.85 ± 1.96 ②Stage: I期16例 0% 1.19 ± 0.57, II期8例 12.5% 1.99 ± 1.47, III期16例 12.5% 2.78 ± 4.25, IV期25例 60.0% 10.11 ± 15.09, ③TN.M因子: M factorによるS値の変動が一番つよく, Mo: 40例 7.5% 1.97 ± 2.79 に対しM1: 25例 60.0% 10.10 ± 15.09であった。

I - D - 52

肺癌患者の術前血中CEAと手術所見

岡山大学第二外科

○清水信義, 安永英孝, 国方永治, 栗田 啓, 原 史人, 寺本 滋

肺癌の腫瘍マーカーとして血中Carcino embryonic antigen(CEA)は広く臨床で使用されているが, 実際に腫瘍の進展範囲をどの程度反映しているかについては不明な点が多い。そこで我々は肺癌患者で開胸手術を行った174例について, 術前の血中CEAと手術時の胸腔内進展の程度, リンパ節転移の有無, 腫瘍の大きさなどの関連性について検討したので報告する。

成績: 174例の手術症例の術前血中CEA陽性例は95例, 54.6%, 陰性例は79例, 45.4%であった。これらの症例で切除した腫瘍の大きさと術前血中CEAの関係をみると, 腫瘍の大きさが3.0cm以下のものでは7例のみが陽性であり, 腫瘍径が大きい程陽性率は高かったが, CEA値とは相関しなかった。

胸腔内リンパ節転移と血中CEAの関係をみるとCEA陽性のものの49.5%にリンパ節転移がみられ, 32.6%は郭清したリンパ節に転移が認められなかった。しかし血中CEA陰性のものの29.1%でリンパ節転移が陽性であった。

組織型でみると腺癌では70例中40例, 57%が血中CEAが陽性であり, 扁平上皮癌は77例中38例, 49.3%が陽性であった。

術後のTNM病期ではI期症例71例中30例, 42.3%, II期症例では20例中12例, 60%, III期症例では64例中43例, 67.1%が血中CEAが陽性であった。

術前CEA値が高値のものは1年以内の死亡が多く, 術前陰性のものでは死亡は有意に少なかった。

結論: 外科手術の対象となった肺癌では, 術前CEA陽性率は54.6%であり, 病期の進行とともに陽性率は高くなる。又胸腔内リンパ節転移陽性のものは, 血中CEA陽性率が高い。腫瘍の大きさでは3.0cm以下のものは陽性率が低く, 腫瘍の大きいほど陽性例が多かったが, 胸膜浸潤や隣接臓器浸潤との間には関連はみられなかった。